國學院大學学術情報リポジトリ

シオニズムと同化ユダヤ人

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村山, 雅人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000823

シオニズムと同化ユダヤ人

村山雅人

キーワード
シオニズム　反ユダヤ主義　同化ユダヤ人　東方ユダヤ人　世紀末ウィーン

I

政治的シオニズム運動の発生と拡大

ハプスブルク・オーストリアは一八六六年対プロイセン戦争に敗れて絶対君主制から立憲君主制に移行し、翌年十二月国家基本法、通称「十二月憲法」が制定された。そして一八七〇年、ローマ教皇庁と結んでいた政教条約を破棄して、社会生活を規定していた諸々の宗教的規則を排除した。ここにリベラルな市民階級が政治を主導する新時代が始まった。

多民族国家オーストリアにおいて、非ドイツ系国民にとって最も重要な新憲法の条文は、諸民族の平等の権利が謳われた第十九条であった。「国内のすべての種族は平等であり、各の種族は自己の民族性と言語を保持し、保護する不可侵の権利を有する」。しかし、この条文

の保護対象にユダヤ人は含まれなかった。ユダヤ人は独立した種族としては認められず、単にユダヤ教の信徒集団としか承認されなかったからである。だが、ウィーンのユダヤ人社会で大きな影響力を誇示していた同化ユダヤ人にとって、この第十九条はそれでも非常に大きな意味を持った。なぜなら、自らのアイデンティティをユダヤ人ではなくドイツ人とみなしていた同化ユダヤ人が強く求めていたのは、社会生活における活動の自由と平等であって、ユダヤ人がオーストリア帝国を構成する一つの自律した民族として認知されることなどまったく必要と感じていなかったからだ。じじつこの政体の変化によって、ユダヤ人の社会進出の環境は整い、彼らの主たる望みは達成された。こうしてオーストリアの近代化は、リベラリズムの政治体制と同化ユダヤ人の経済進出が両輪となって進展し、彼らが興した事業は国内経済市場を独占するまでになった。同化ユダヤ人の圧倒的な経済優位が中・下層のキリスト教徒の間に反ユダヤ感情を呼び起こし、反ユダヤ人行動が顕現化していく。これは従来の宗教的な理由に由来する「ユダヤ人嫌い」や「ユダヤ人排斥」とは異なって、強大化していくユダヤ人の経済力が惹起したまったく新しい現象であった。それを言い表す新しい用語「アンチセミティズム」が出現した。(1)

リベラリズム政権下で実現したユダヤ人解放と、リベラル派の代表的な政治家アントン・シュメアリングが象徴的に表した時代精神「知識は力なり」を反映して、アカデミックな教養と専門知識が社会的上昇のために必須条件になったことによりユダヤ人学生の比率が急増した。その結果、反ユダヤ人行動は一八七〇年代後半まず大学を拠点にして始まった。やがてユダヤ人攻撃は、人種主義者でドイツ民族派政党「ドイツ人連盟」を率いたゲオルク・シェーネラーに取り込まれたドイツ民族派シンパの学生が先兵となって、さまざまな所に拡大していった。シェーネラー傘下のこの運動は、しかしながらその過激さゆえに政治勢力として確固たる基盤を築くには至らなかった。

大衆参加の政治の時代に突入した九〇年代、シェーネラーと入れ替わるかのように、アジテーターとしての才を発揮して庶民の心を掴んだ政治家が登場した。このポピュリストは名前をカール・ルエーガーと言った。彼は民族派の野蛮な反ユダヤ主義を卓抜なレトリックを操って巧妙に政治宣伝へと変容させることに成功し、有権者資格の緩和によって新たに誕生した選挙民層の支持を取り付けて弱小政党キリスト教社会党をウィーンで最大政党へと育て上げた。そして彼は、一九一〇年に死去するまでウィーン市長として君臨した。ヒトラーが人心掌握手段として反ユダヤ主義の有効性を体得したのはルエーガーの政治手法を直に見聞したことにあった。また社会主義政党も、日常活動において反ユダヤ政治宣伝を行使する列に名を連ねた。なぜなら、優良産業資本をユダヤ人がほぼ独占するという特殊な社会構造を呈していた十九世紀末オーストリアで反資本主義を訴えれば、必然的にユダヤ人攻撃を避けて通れなかったからである。かくして

九〇年代以降、大衆選挙民層を獲得して党勢拡大を図るためには、ニュアンスの差こそあれ、一様に「反ユダヤ」を政治スローガンに掲げなければ選挙戦を戦えない時代状況に入った。この状況下、ユダヤ人の大部分を占めていた未同化の下層ユダヤ人の惨めな実体を、ユダヤ人作家ヨーゼフ・ロートはこう素描する。「東方ユダヤ人でいることは恐ろしく悲惨である。ウィーンにいるこのよそ者のユダヤ人の運命ほどむごいものはない。（略）キリスト教社会党員からみれば、彼らはユダヤ人であり、ドイツ民族派にとっては、セム人種である。そして社会民主党員たちは、彼らを非生産分子とみなした」[2]と。

宗教および民族そしてイデオロギーと社会生活のあらゆる方向からのユダヤ人攻撃に直面して、キリスト教社会に同化してキリスト教徒との共生を目指す努力は無効であると判断した同化ユダヤ人学生たちがいた。彼らは一八八二年ユダヤ民族主義学生組合「カディマー（前進あるい東への意）」を結成して「同化の否定」、「ユダヤ民族への帰属宣言」、「パレスチナ入植の促進」を運動目標に掲げた。その代表者が、エルサレムにある丘の名称で、かつ聖都エルサレムそのものをも表す言葉でもある「シオンZion」からユダヤ民族郷土建設運動を指す用語「シオニズムZionismus」を編み出したナータン・ビルンバウム（一八六四～一九三七）であった。「ismus」は政治的概念を含む接尾辞であり、シオニズムという語にビルンバウムは「シオン主義」という政治的な意味を込めたのであった。つまりこの語には、当時モーリッツ・ヒルシュなどの博愛主義者の富豪が進めていた、パレスチナ以外の地域、たとえばアルゼンチンなどへの大量移住プロジェクトに異を唱え、パレスチナ中心主義への自覚を改めて迫る意味が込められていた。[3]現在一般に、テオドール・ヘルツル（一八六〇～一九〇四）が政治的シオニズムの創始者として承認されているが、この運動の先駆けは、本来ナータン・ビルンバウムであると評価されるべきであろう。政治的シオニズム運動が拡大期に入った頃、この両者は運動の主導権を巡って争った。結局、ビルンバウムはヘルツルの後塵を拝すことになり、シオニズム運動から退いていく結果になった。

テオドール・ヘルツルは一八九六年『ユダヤ人国家』を上梓して、東方ユダヤ人（東欧およびロシアに暮らす未同化のユダヤ人。また、同化ユダヤ人を指す西方ユダヤ人の両語ともビルンバウムの造語である）の間で大きな反響を呼び起こし、モーゼの再来と熱烈に歓迎された。彼はその余勢を駆って翌九七年バーゼルで第一回国際シオニスト大会を成功させ、大会直後日記にこう記した。「バーゼル大会を一言で総括すれば、公言するのは用心しなければならないが、私はバーゼルでユダヤ人国家を建設したということだ。もし今それを大声で言ったりすれば、私は世界中から笑われるだけだろう。もしかしたら五年後に、いずれにせよ五〇年後には、世界はそれを確認することになるだろう」[4]と。この予言めいた言葉は、一九四八年五月十四日に実現し

た。暫定首相ベン・グリオンが、周辺アラブ諸国の同意無しに、イスラエル共和国樹立を宣言したとき、壇上の背後中央にユダヤ人国家を象徴する形姿としてテオドール・ヘルツルの肖像写真が飾られ、国家再興の祖とされた。じっさい、シオニズム運動を世界に認知させてヨーロッパを越えた規模の潮流にした功績は、ひとりヘルツルの行動力に負っていたのは確かだ。そればかりか、スティーヴン・ベラーは「〈ユダヤ人国家〉が世に出ていなかったならば、おそらくイスラエルという国は存在していなかっただろう」[5]と言い、ヘルツルの存在意義を強調する。

反ユダヤ主義の一つの解決策としてシオニズムが登場して以来、この運動はポグロムに苦しめられていた東方ユダヤ人から熱狂的に歓迎された。一方西欧の同化ユダヤ人、つまり西方ユダヤ人は、この運動の提起者がビルンバウムを含めて同化ユダヤ人であったにもかかわらず、その圧倒的多数はシオニズムを無視、あるいは否定し、そればかりか露骨に嫌悪感を表しさえした。ウィーンで強い影響力を誇った同化ユダヤ人を支配していた、この雰囲気の中でシオニズムに公然と賛意を表明することは、確かに自ら大きなリスクを取る覚悟が必要な行動であった。ヘルツルと行動を共にしたイシドール・シャリットは、そうしたウィーンの空気を「この問題は、同化ユダヤ人にとってあまりにもばかばかしく、また彼らの将来の経歴を極めて危うくするものに見えた」と解説し、それでもヘルツルはひとりの積極的な協力者を獲得したことを伝えている[6]。それはフェーリクス・ザルテンだった。彼はシュニッツラーやホフマンスタールと親しい関係にあって、ウィーンの作家グループ「若いウィーン」の重要メンバーのひとりだった。ザルテンは「子供の時はユダヤ人ではなかった」と言いように、ウィーンの同化ユダヤ人家庭では珍しくない、宗教に無関心な環境の中で成長した。ユダヤ人の出自に無感覚であったこの少年が、やがてユダヤ人の自覚を迫られる時がくる。一八七〇年代末から反ユダヤ人風潮はギムナジウムにも広がり、そこではじめて彼は直接反ユダヤ主義を体験し、のちにそれを成長過程における「屈曲」と表現した。それ以降、ユダヤ人としての自覚は時間の経過と共に彼の内部で強まっていった。この心情変化をさらに強力に促進させる、ザルテンにとっては事件ともいえる出来事が起こった。テオドール・ヘルツルの登場である。「わたしは彼によって自分が正しいとわかり、彼の風貌や人間性、彼との交流がわたしを夢中にさせた。彼の犠牲をいとわない、勇気ある信条表明が、わたしや偽りのない感受性をもった人たちに、彼に味方してイスラエルを認めるのが義務である、と命じたのである」[7]。彼はヘルツルの死後も、プラハやレンベルクなどの東欧主要都市に講演旅行を行うなどしてシオニズム運動と接点を断つことはなかった。「若いウィーン」のリーダーを自認していたヘルマン・バールはヘルツルが死んだとき、ザルテンに後継としてシ

オニズム運動の牽引役を果たすべきだと勧めたという。[8]

大多数の同化ユタヤ人がさまざまに表現したシオニズムに対する否定的な評価は、大別すれば二つの因由があった。反ユダヤ主義の防衛を含め、普遍主義を標榜してあらゆる類いの民族主義を否定した社会主義からの批判がひとつ。じっさい、反ユダヤ主義が激化したこの時期に、オーストリアで複数存在した社会主義運動を「社会民主党」に一本化して大政党を結成したのは、かつてドイツ民族派に所属してドイツ人と共に闘った経歴を持つ、同化ユダヤ人のヴィクトール・アードラーであった。しかもオーストリアの社会民主党は指導部を同化ユダヤ人インテリが独占するという特殊な状況を呈していた。もうひとつは、反ユダヤ主義をオーストリアのリベラルな政体が助長したユダヤ人の急激な社会進出に起因した一過性の現象と捉えて、同化努力は依然有効であるとする態度である。そしてこれが、同化ユダヤ人の最大多数を占める考えであった。いずれにせよ、シオニズムに対する態度によってユダヤ人は二分され、さらに東方ユダヤ人と西方ユダヤ人の間に潜在的にあった対立感情がより鮮明に現れた。本論ではウィーンの文化や社会の担い手として、ヘルツルと活動時期が重なる同化ユダヤ人市民階級が、シオニズムにどう向き合ったかについて証言をもとに検証し、それを通じて西方ユダヤ人と東方ユダヤ人の関係についても論究する。

Ⅱ

一、ユダヤ人国家建設ではなく啓蒙教育

『ユダヤ人国家』が出版されると、すぐに医師で評論家のルートヴィヒ・エルンストは『ユダヤ人国家ではなく良心の自由』を著す。彼はヘルツルの書を通常であれば荒唐無稽で狂気の沙汰として笑い飛ばすのが相応しいであろうが、この作者の知名度に鑑みて、単に首を横に振るだけで済ますわけにいかないとして、副題「ヘルツル博士の〈ユダヤ人国家〉への反論」が示すようにユダヤ人国家構想を徹底的に批判する。

エルンストの批判はこう始まる。ヘルツルのユダヤ人国家建設の主張は、ユダヤ人が二千年に渡ってヨーロッパであらゆる苦しみや迫害そして拷問にも耐え抜いた成果として、キリスト教徒と共に創造してきた芸術、文化、学問および有価財産のすべてを捨てて、新しく

建設されると宣伝される、その実体が皆目わからない「祖国」へ一緒に大挙して行こうと人々を扇動しているに過ぎない。故に、彼はヘルツルを、現在反ユダヤ主義という逆境に直面しているユダヤ人から勇気を奪い取って「臆病と逃走」を吹聴する最も危険な「敵」と断定する。[9] 一八六七年の新憲法によって、社会生活においてユダヤ人に自由と平等が認められたが、現実は依然としてユダヤ人が信教を理由に日常的に差別や暴力被害を被っていることを彼も認める。ところがエルンストは、そうであればこそヘルツルとは逆に、原居住国を真の祖国として与えられてしかるべき権利を獲得するために、必要とあれば死ぬ覚悟で戦うことがユダヤ人の果たさなければならない義務であると考える。[10] その理由を「信教からすればユダヤ人であるが、われわれにとって宗教以上の高所に位置するのは祖国と国籍である」[11] からと説明する。じっさい、西暦七〇年の第二神殿破壊以降おおよそ二千年にわたってディアスポラで生きてこざるを得なかったユダヤ人にとって、確保すべきものは現祖国とそこへの帰属を証明する国籍以外にはない。現実のユダヤ人にとっては、いわゆるユダヤ人国家は、せいぜい遠い歴史的状況の追憶対象でしかないのである。

程度の差はあるにしても同化を強いられた長いディアスポラの歴史の過程で、エルンストが言うように、ユダヤ人とキリスト教徒との間には信教以外に――それすら西欧同化ユダヤ人の場合は大いに疑問であるが――違いはほとんど認められなくなってしまっている。この渾然一体と化してきたヨーロッパ社会の実体を、エルンストは次のように解説する。「精度の高い顕微鏡でユダヤ人の細胞とキリスト教徒のそれを比較した場合、その化学反応にはいかなる違いも見つけられない。二千年の間に強制的もしくは自由意志でキリスト教に改宗したユダヤ人が非常にたくさんいるし、キリスト教徒と結婚したユダヤ人もたくさんいる。因って、体液にユダヤ人の部分が全く混入していないキリスト教徒はきわめて少ないのが実情である。反ユダヤ主義の先導者の中にさえユダヤ人との血縁者がいるのが実態なのである」[12] と。

エルンストはこの人種融合社会の中で起こった反ユダヤ主義を、自由主義政治の寛容政策がもたらしたユダヤ人解放の反動として出現した一過性の社会現象でしかなく、しかもそれはこの時代においても根本的に宗教的偏見に根ざし、その上「下級聖職者が酒場の英雄たちを煽動して起こした騒動」[13] 以外の何物でもないと結論づける。彼はしたがって、その主体をなす大衆を啓蒙すれば反ユダヤ行動を収束できると理解して「啓蒙教育と良心の自由協会」という啓発機関をすべての国に設立することを訴える。エルンストは、啓蒙教育が徹底されれば、信教が人間を区別するものではなくなり、敵対および対立し合っていた人間やグループの宥和が進展すると了解したのである。

現下の反ユダヤ主義の原因を今もって宗教間の不和、あるいは誤解や偏見とみなすエルンストは、その解消を、市井の神父たちとはまったく別人格の存在と認識し、彼によれば「高貴なる人間」に属する高位聖職者に絶大な期待を寄せた。「（高位聖職者は）キリスト教の成立をそこに負っているユダヤ人に対して常に寛容であった。じじつ、かつて教皇たちはユダヤ人の庇護者であった。権能を有したこうした人物からこの方向に沿って啓蒙努力がなされたなら、教会の名誉を汚すこの忌まわしい行動を止められるかもしれない」と。[14] しかしこの認識と判断は、ヘルツルのユダヤ人国家建設構想を、彼が荒唐無稽と揶揄して退けたのと劣らず荒唐無稽であり、かつ、あまりにもナイーヴで楽観的と判断せざるを得ない。しかも反ユダヤ主義がもっぱら古くから言われてきた宗教に原由があるとする認識は誤りである。

エルンストが提示した啓蒙教育による問題の打開は、十八世紀の啓蒙主義時代から常に主張されてき、ユダヤ人解放にとってすでに言い古された理論である。それでも彼の案に認められる新しさを探すなら、彼が示した啓蒙運動の伝播方法であろう。つまり彼は、国際的に連帯して無知な勤労大衆に対する啓蒙効果をすでに発揮している労働組合運動に倣って「啓蒙教育と良心の自由協会」を組織、展開し、さらに運動の対象を単にユダヤ人だけでなく、信教が故に攻撃にさらされているすべての宗教団体や個人へと拡大、発展させようとした点であろう。

二、シオニズムは欺瞞的な政治プロパガンダ

カール・クラウスがシオニズムに言及したのは、一八九八年一月雑誌『秤』に寄せた「ウィーン時報」が最初であった。そしてこの年、彼によれば誕生の偶然によってその会衆の一員になっていたユダヤ教を脱会した。彼は「ウィーン時報」の中で、第一回シオニスト国際大会でシオニスト機構の総裁に選出されたヘルツルを「シオンの王」と揶揄し、シオニズムが目指すユダヤ人国家建設は反ユダヤ主義の偏見を承認して、それを肯定するところに立脚していると批判する。したがって、シオニズム運動はこれまでの同化努力をすべて無為にする試みである、と規定した。[15] そして翌一八九九年このテーマを独立させて論じた小冊子『シオンの入会金一クローネ』を上梓し、その冒頭でヘルツルをユダヤ民族の代弁者と自称してヨーロッパにいるすべてのユダヤ人の目を無理矢理日の出方向に転じさせて故国パレスチナへの帰還を煽動し、その為の寄付金を募っている紳士と嘲笑混じりに紹介する。つまり彼が行っていることは、ニーダー・オーストリア州議会でユダヤ人を「駆除」するために援助金条例の制定を発議したキリスト教社会党議員と同じ性格のものであって、「シオニズム」

という新たに登場した運動は、以前から耳になじんだわかりやすい言葉を使えば「反ユダヤ主義」と同義であると冷笑的に断定する。[16]

クラウスのこの極端で悪意があるシオニズム批判や、当時彼の言説に頻出したユダヤ人攻撃は、シオニストの側からだけでなく大いに批判を呼び起こした。たとえば、彼のユダヤ人攻撃は「ユダヤ人の自己憎悪」やマゾ的な反ユダヤ主義である、と。[17] いずれにしてもクラウスは、形を変えた反ユダヤ主義者だと攻撃された。クラウスはその言動から反ユダヤ主義者と批判される余地は十分あり、じっさい彼の反ユダヤ語法は、字面がそのままイェルク・ランツ・フォン・リーベンフェルスなどの人種的反ユダヤ主義者の政治宣伝に利用され、彼は「アーリア・ゲルマン人の救済者」とか「名誉アーリア人」と意図的に歪曲されて宣伝されることになった。[18] しかしながら、彼を反ユダヤ主義者と決めつけるわけにはいかない。当時、シオニズムとはユダヤ人攻撃の激化をむしろ自らの目標達成には好都合と考えて、それを逆用した新種の反ユダヤ主義との思いを募らせていた同化ユダヤ人が多くいたからだ。このブルジョア同化主義に基づくシオニズム否定とは別に、クラウスの場合もうひとつ別の要因を『シオンの入会金一クローネ』の中の文章に見つけることができる。「ユダヤ人が今回乾いた足で約束の地にわたれるとはほとんど思われない。もう一つ別の紅海である社会民主党が彼らの行く手を閉ざしてしまうであろうから」。[19] この評論を書いていたとき、クラウスは社会民主党支持の立場を表明していた時期に当たる。社会主義が依って立つ所は、いかなる種類であれ民族主義の否定である。シオニズムとはユダヤ民族主義を基盤にしたユダヤ人国家建設を目標にした運動以外の何物でもなく、したがってこの政治運動は到底容認できなかったのである。さらにまた、オーストリア全体の縮図であるウィーンにおいて、クラウスがとりわけ腐敗の温床とみなして攻撃した資本主義はユダヤ人と表裏一体をなしていたので、攻撃は必然的にユダヤ人が対象になるという特殊な社会構造にあった。こうした事情が彼の表現をいっそう過激にさせた一因であった。

不穏当な表現が散見するこの小冊子について、のちにカール・クラウスはその内容を誤りとして取り消すことは決してしないとしながらも、二三歳の時に表明した意見をそのまま堅持することは不可能であると弁明する。「わたしはウィーンのシオニズムの成立過程で登場したかなり多くの現象をグロテスクに感じてはいるけれども、この小冊子に書かれている大部分について、今であれば恐らく言及しないか、あるいはそのようには言わないであろう」。[20] また、彼はヘルツルの行動についても、反ユダヤ主義の登場によって頓挫した同化という目標をパレスチナで達成を図ろうとした同化ユダヤ人のそれにすぎず、彼が主導したシオニズムの実体は、西欧における共生社会の実現という夢に破れた西方ユダヤ人が他所で政治的自己実現を遂行しようとした行動に他ならない、と批判路線を放棄することはなかっ

た。だがヘルツル個人については、「シオニズム運動は、ヘルツルが一生をかけた記念碑的な事業であった[21]」と評価して、彼にしては大きな軌道修正を試みた。

クラウスのシオニズム批判はその極端な言葉遣いに目を奪われがちであるが、この政治的なプロジェクトに対する彼の否定的な評価は、ひとつにはユダヤ人の民族的アイデンティティの問題に由来する。つまり、二千年近くディアスポラの中で生きてこなければならなかったユダヤ人に必然的につきまとう、民族として共通のアイデンティティが保持されているかという問題である。かろうじて未同化ユダヤ人には互いを同定できる共通項としてユダヤ教をあげることができるが、同化ユダヤ人の場合はそれすらなく、じっさい、世界中に散在して生活しているユダヤ人は永年各人が定住してきた国や地域の性格や文化が各個人の特性となっている、さまざまな「ユダヤ人」である。言うならば、ドイツやフランス、イギリスのユダヤ人、あるいはスラヴの、たとえばロシアやポーランドのユダヤ人、またオーストリアの、中でもガリチアのユダヤ人、さらにその上、ユダヤ的伝統を失った環境で育った都会のユダヤ人、もしくは伝統を墨守した風土で育ったいわゆるゲットー・ユダヤ人という風に、今やユダヤ人という呼称は、それぞれ異なった言語や文化背景、風習や慣習そして宗教事情のもとで人間形成された多様で雑多な、古くはパレスチナに起源を持つ人種の総称となってしまっているのだ。

したがって、他の民族に固有のさまざまな特性を吸収して、かつては持っていた民族のアイデンティティを喪失してしまったユダヤ人を、たとえば言語を例に引けば、ヘルツルがスイスに範を取った言語連邦主義という曖昧な言語政策のもとでひとつの国家的全体へと統合できるとは、クラウスには到底想像できなかった。ゆえに彼は、シオニズム運動を決して実現可能なプロジェクトとはみなさず、欺瞞的で有害な政治的プロパガンダだと判定して、『マタイの福音書』第十一章二八節の書き出しだけをそのまま借用して、原典にある呼びかけを彼一流のレトリックによって改変し、シオニズムの宣伝に惑わされないように警告を発する。「疲れた者、重荷を背負っている者はこちらに来なさい。シオニストたちが宣伝するよりよい未来を信じて、今を悲しんではいけない。君たちを連れて行こうとするあの国を憧れて眺めてはいけない。そこはヨブの住む〈ウヅの地〉だ[22]」。

このアイデンティティへの疑問は、シオニズム運動の実現の可能性を問題視する理由の最大公約数のひとつを成す。シュニッツラーもこの点をいぶかり、ディアスポラ以降ヨーロッパ中に四散してヘブライ語以外の言葉で育った人間がパレスチナに着いて、生れ育ったドイツやフランス、イギリスといった国ではなく、パレスチナが本来の故郷だと感じることを想像することは困難だ、と指摘する[23]。そして

ウィーンの主席ラビであるモーリッツ・ギューデマンでさえ、シオニズムが登場する以前は、「ユダヤ人」は宗教グループを指す呼称であると言い、ディアスポラの下にあるユダヤ人の民族としての存在を否定する。[24] こう見ると、「十二月憲法」の第十九条でユダヤ人が帝国を構成する自律した民族に参入されなかったのは、ユダヤ人を憲法の保護対象から排除することを意図したものではないと判断できる。シオニズムの主唱者ヘルツルも、『新しいゲットー』執筆時（一八九四）にはすでに同化による共生の可能性への信頼は揺らいでいたが、ユダヤ人の規定についてはまだ次のように理解していた。「ユダヤ人の歴史的故郷の場所を地図上に探し出すことはいたって簡単で、学校の生徒だって知っていることだ。だが、ユダヤ人がじっさいに〈故郷に帰った〉としても、彼らは次の日には、とっくの昔に互いに緊密な関係でなくなってしまっていることに気づくだろう。彼らは数百年にわたってそれぞれ新しい故郷に根付き、その国籍が与えられていて、互いに別物となってしまっている。性格の類似性は至る所で彼らに加えられた圧力によって得られたもの以外にはないのである」と。[25] シオニズム運動に没頭していたときでさえ、彼は自身のアイデンティティを「ハンガリー出身のドイツ人のユダヤ人、つまりドイツ人以外の何物でもあり得ない」[26]と規定している。かようにシオニズムにとって最大の課題は、宗教を除けば、ユダヤ人の民族的アイデンティティ問題に納得させられる回答を示すことができるかどうかであった。

『シオンの入会金一クローネ』に示された反ユダヤ主義を克服する道は、簡潔に述べれば同化の推進と寛容さへの期待である。クラウスは現下の反ユダヤ主義を、ユダヤ人の急激な勢力拡大によって、キリスト教徒がそれに幻惑されて正しく判断できない状態に起因した一時的現象にすぎないとみなして、こう言う。「キリスト教徒はときどき、ユダヤ人が国民であることを忘れるのだ。それでも私は、彼らに時間さえ与えれば少しは文化に目覚めて自分たちの忘れっぽさを改めるだろうと信じる」[27]。因って、キリスト教社会に同化して共生する可能性は依然開かれており、同化が反ユダヤ主義を克服できる唯一の方策と了解した。だからこそ、東方ユダヤ人の側も「正統派信仰の影響をすべて排除して、とっくに時代遅れになった服装や髪型に付いて回る偏見を完全に克服」[28]する、つまり同化して近代的に自己変革することが、問題の解決の現実的な道であると推奨する。そしてこの同化能力こそがディアスポラの中で生き抜いてきたユダヤ人の特筆すべき希有な特性であると理解した。「剛直なシオニストも数年うちに簡単にヨーロッパ人になって、文明化するに違いない」[29]と。それ故、この順応性をユダヤ人の特性であると信じることが「最善の正統派信仰」であり、今やそれを「先祖伝来の信仰」と置き換えるべきであると主張する。[30]

三、シオニズムではなく「内なる道」の発見

テオドール・ヘルツルは一八九五年『新自由新聞』パリ特派員を終えてウィーンに戻るとすぐ当時良好な関係にあったアルトゥール・シュニッツラーを訪ねてユダヤ人問題を解決したと報告し、一緒にパレスチナに行こうと誘った。この二人はそれぞれの性格の違いによって、学生時代に最初に出会ったときは互いに好感が持てず、関係の好転を予測させる要素は何ひとつ見当たらなかったが、パリにいたヘルツルがシュニッツラーのイプセン風の社会劇『メルヘン』を高く評価したことを契機に二人は急速に親密になった。だが、シオニズム運動に好意的な反応を期待していたヘルツルは、シュニッツラーの反応に裏切られたと感じ、それ以来ヘルツルの接し方に変化が現れ、二人の関係は再び悪化して双方が互いを「我慢がならない」と公言してはばからなくなった。

シュニッツラーがヘルツルの誘いに乗らなかったのは、のちに友人に告げたところによると、高度な外交手腕を必要とする政治運動であるシオニズムを一介の文学者が実現できるとはまったく想像できなかったからだった。[31] もちろんシオニズムは、シュニッツラーの考えたユダヤ人問題の解決策とは異なっていたが、彼はシオニズムを頭ごなしに否定したわけではない。シオニズムがひとつの救済運動として出現せざるを得なかった社会情勢とそれがもつ意義を認めて「迫害されて精神的にさいなまれている貧しいユダヤ人にとって、シオニズムは最高度の福祉活動としての意味を持つ」と評価するが、いつの日か過去のものに、つまり単にある時代状況がその出現を必要とした一歴史的事象になる運命にあるとみなしていた。[32] これがシュニッツラーのシオニズムに対する基本見解である。この姿勢は反ユダヤ主義をゲットー解放後の一時的な反動現象とする認識および彼自身のアイデンティティ規定に由来する。「わたしは自分を決してユダヤ人の作家だとは見ていない。わたしは、証明され得る限り、ユダヤ人種に属し、もちろんその血は主にユダヤ人のものであり、そればかりか特性の多くの点で、典型的にユダヤ人のものとみなされ得る幾多のものを備えていると自覚している〈ドイツ人〉作家だと思っている」。[33] 社会状況や自分をこのように自認する同化ユダヤ人シュニッツラーは、先祖が二千年近くもディアスポラの状況でさまざまな文化地域に定住して多様な生活文化のもとで生きてきたユダヤ人が、また、これまでユダヤ人であるという事実によって、主観的にも客観的にも、個人的に被害を被った覚えのないユダヤ人でも、パレスチナの土を踏んだとたんその地を故郷だと感ずるはずだとシオニストが主張するのは、民族や個人の心理的状況の歪曲であると、つまり欺瞞だと反論する。[34]

シュニッツラーは長くシオニズムやユダヤ人問題に直接言及することはなく、ヘルツルが死んだ一九〇四年に集中的に取り組んでいた長編『自由への道』においてはじめてシオニズムについて見解を示した。小説は世襲貴族のゲオルク・フォン・ヴェルゲンティンと中流市民層に属するアンナ・ロスナーの身分違いの悲恋物語が筋の大枠を構成する。そこにもう一つ別の、小説の本来のテーマを成す、一九〇〇年当時のウィーンのブルジョア同化ユダヤ人の社会を写し出した物語が入れ込み式に挿入される。そして二つの異質な物語は、このユダヤ人社会と唯一交流があるドイツ人の主人公ゲオルクによってかろうじて接点が保もたれて、いわば彼が作品全体の狂言回しの役割を担ってウィーンの市民世界のさまざまな側面から、深刻化しつつあったユダヤ人問題が浮き彫りにされる。そしてシュニッツラーは、彼の分身と解される人物ハインリヒ・ベルマンを通じてシオニズムに対する見解を表明する。小説ではアンナの弟ヨーゼフが一員の「ユダヤ人からの浄化」をスローガンに掲げたアーリア人の反ユダヤ主義グループの行動にも言及されるが、それはきわめて表面的な描写にとどまり、単にルエーガー施政下のウィーン社会の動静を示すクリシェの域を出ていない。

小説の中心テーマは、ユダヤ人実業家エーレンベルクの妻と娘が主催するサロンに出入りするさまざまな人間、その大部分を占める同化ユダヤ人市民階級の言動を通じて展開される。たとえば、洗礼は受けていないが今まで一度も自分をユダヤ人だと感じたことがないので、反ユダヤ主義は自分とはまったく無関係の喧噪に過ぎないと嘯く類いの、完全に出自意識を喪失してしまった同化ユダヤ人。それとは反対に、死ぬ前に一度は民族の聖地エルサレム巡礼を実現しようとしているシオニズム・シンパのエーレンベルク氏とユダヤ人ではなくカトリック教徒でありたいことを隠さない予備役将校の息子。この父子の関係がある時父親の誤解を誘発し、公衆の面前で父親に息子が平手打ちを受けて、名誉を汚される出来事が起こる。これが原因で、息子は自殺を図る。また、尊厳を保った人間としての生きる道をシオニズムに求める没落市民階級出身のレーオ・ゴルヴスキーと、それとは逆の普遍主義を主張する社会主義運動に自己確認の居場所を求めるテレーゼ・ゴルヴスキー姉弟。このテレーゼ・ゴルヴスキーを翻意させるために、エーレンベルク氏はかつて同化ユダヤ人が希望を託したリベラリズム政体の実体と、現下かなり多数の同化ユダヤ人が期待を寄せている社会主義の今後の行方を見事に解説してみせる。

「テレーゼさん、わたしはあなたに断言します。かつてリベラル派やドイツ民族派のユダヤ人に起こったことと同じことが、あなたたちユダヤ人の社会民主党員の身にも起こりますよ。（略）オーストリアで、リベラルな運動を起こしたのは誰でしたか。　ユダヤ人です！　そのユダヤ人が誰から裏切られて捨てられたと思いますか。　リベラル派の連中からです。　誰がオーストリアでドイツ民族派の運動を

起こしたと思いますか。　ユダヤ人です。　そしてそのユダヤ人は誰から見捨てられましたか。――私が言った、見捨てられたとは、犬に対するようにつばを吐きかけられたという意味ですが。　それはドイツ人からです。　社会主義や共産主義においても、これからあなたたちの身にまったく同じことが降りかかるでしょう。つまり、スープの用意が調うやいなや、彼らはあなたたちユダヤ人をテーブルから追い出してしまうのです。これまで、いつもそうでしたし、常にこれからも変わらないでしょう」[35]。エーレンベルク氏が指摘した、リベラリズム信奉者の同化ユダヤ人の運命を辿ったのが、ハインリヒ・ベルマンの父であった。彼の父はリベラリズムが民族間の平等を掲げて国政に登場した一八六〇年代末、大望を抱いて弁護士から帝国議会議員に転身して成功を収めるが、反ユダヤ主義が政治勢力に発展すると同じ会派のドイツ人たちにグループから追放されて惨めな最期を遂げる。この父を、息子はオーストリアの政情に翻弄された、まさしくあの時代が生んだ悲喜劇的な人物の典型的形姿と皮肉に眺める。「祖国を愛するユダヤ人、ぼくの言っているのは、父がしたように連帯感を持ち、かつ王家に感激したユダヤ人は、まさしく悲喜劇的な人間でしかない。つまり父は、賢い人間といえども時代の決まり文句に幻惑された七〇年代から八〇年代、あの自由主義化していった時代の人間だった。今であれば、そんな人間は滑稽としか言いようがないだろう」[36]と。

このハインリヒ・ベルマンの人物特性はこう要約できる。彼は宗教に対しては無頓着、むしろ無神論者を気取る、リベラリズムの時代に人間形成期を過ごした典型的なウィーンのインテリで、また、ユダヤの伝統やその伝統に忠実なユダヤ人に対して偏見と一種侮蔑意識をもった、都会で教育を受けた同化ユダヤ人の類型的な、まさしくシュニッツラー自身もそれに当たるタイプをも具現している、と。そしてそれは彼の体質となっていることがゲオルクに語る言葉に言い尽くされている。「ぼくがユダヤ人の犯すミスや欠点にとりわけ敏感であるということをぜんぜん否定するつもりはない。恐らくそれは、ぼくが、いやわれわれはみんな、われわれとはユダヤ人のことだが、そういうことに敏感になるように一貫して育てられたことに依るのだろう。子供の時からわれわれはユダヤ人の特性をとりわけばかばかしいとか、いやなものと感じるように仕向けられてきたのだ。でも、他の人たちの同じようにばかげた、忌まわしい特性についてはぜんぜんそうした感情は起こらないんだ。ところが、ユダヤ人がぼくの前で不躾でばかげた振る舞いをしたら、時としてぼくは非常に恥ずかしい感情に襲われて消えてしまいたいとか、穴があったら入りたいと思うのだ。――恐らくそれはエゴイズムにすぎないのだろうけれど」[37]。

小説のキーワードをなす「シオニズム」に対する作者の見解は、ベルマンがレーオと交わす議論を通じて明らかになる。国際シオニス

ト大会に出席したレーオから、大会会場で、まだ訪れたことがないパレスチナを、過去に存在した歴史事実としてではなく現実の故国と感じ取って、その地への移住を熱望するユダヤ人たちを直に見て感動したと聞かされたとき、ベルマンは即座にシオニズムをもっとも悪質な安住地探しであると断定する。なぜなら、彼は今や実体を失ってしまっている宗教的かつ民族的な基盤に依拠したユダヤ人国家建設を、ユダヤ人が辿った歴史および精神の発展プロセスに対するナンセンスな反抗にすぎないとみなすからである。こう認識するベルマンは、同じ同化ユダヤ人であるレーオが表明した感激には欺瞞の臭いがすると追及する。「きみだって心の奥底では、この目標がいつか達成されるだろうとは信じていないだろう。いわんや、きみは決してそれを望んでいないはずだ。たとえきみにとって何らかの理由で、そこへ行くことが快適であるにしてもだ。きみにとって〈故郷〉パレスチナとは何なのだ。単に、場所のことなのか。きみにとって〈先祖の信仰〉とは何を意味するのだ。そんなものを、きみだってもうずっと守ってはいないし、またその大部分を、ぼく同様にきみも、まさしくばかばかしく悪趣味な慣習や習慣の寄せ集めとしか思っていないだろう。（略）だから、かりにユダヤ人国家が作られて、きみに首相のポストとか、少なくとも宮廷ピアニストのポストが打診されるようなことがあったとしても、きみは生きているうちにパレスチナに移住することはないだろう」[38]と。ベルマンの理解では、過去の歴史や宗教はヨーロッパ中に離散して生き延びてきたユダヤ人を統合するコアとなることはなく、また、シオニストが強調する迫害と、それに起因する憎しみという共通の感情も、非常に長くさまざま事情が異なる場所で生きてきたユダヤ人にとっては虚偽でしかない。そうすると、シオニズムはまさしく政治的アジテーションであり、それに基づく「祖国」という概念もフィクションでしかなくなる。

但し、ベルマンはヨーロッパの現状に鑑みて、自分たちの境遇を改善するためにエルサレムに行かなければならないと思う人たちがいることは認める。しかし、すぐにこう疑問を呈する。「ぼくの恐れることはただ、間違って思い込んだこの目的地に到着したかなりの人々がすぐに道に迷ったと思いはしないかということだ」[39]と。それ故ベルマンはこのシオニズム運動を、本来その内にさまざまな事情を抱えているユダヤ人問題に対する表面的な解決方法にすぎないと位置づけ、パレスチナへ移住することだけがユダヤ人問題の解決になるとは考えない。したがって、この問題の解決には唯一妥当な方法はなく、あるのはそれぞれの人間が置かれた状況に応じた無数のさまざまに異なった対処方法のみである。このような考え方は、人間に対する、広くは世界そのものに対するシュニッツラーの基本姿勢に由来する。彼はあるときインタビューに答えて、共産主義を否定する根拠をこう述べている。「わたしはボルシェヴィズムに政治的な理由から異議

を唱えているのではなく、それが人間の多様性を否定するがゆえに反対なのです。多様性が根本的な自然法則です。個人の否定は文化の否定に他ならないのです」[40]。彼はシオニズムが推進する集団移住を、一元的な生き方を強制する不条理な試みとみなしたのである。ゆえに、ユダヤ人問題は各自ができる範囲内で独自に解決しなければならない案件であるとして、各が自身の内面と厳しく向き合って、数ある中から己に適した方法を見つけ出さなければならない、と作者は認識し、ベルマンを介して次のように総合判断を披瀝する。

> われわれの時代には（ユダヤ人問題の）解決方法はない。ともかくそれは確かなことで、少なくとも一般的な解決策はない。あるのは、何百何千という解決方法である。なぜなら、さしあたって各人がそれぞれできる範囲で、一人で解決しなければならない問題だからだ。各が自分の怒りや絶望、嫌悪をバネにしてどこで再び自由に息が吸えるかを、どうにかして見つけ出す努力をしなければならないのだ。（略）だからぼくは、自由への旅がみんな揃って団体で実施されるとはぜんぜん思っていない。なぜならそこへ至る道は地表を通っているのではなく、ぼくたち自身の内にあるからだ。各にとって重要なのは自分の内なる道を発見することだと思う。もちろんその為に必要なことは、できる限り曇り無く自分自身の心の奥を見つめる、つまり、心のずっと奥に隠れた片隅に光を当てて照らし出し、本来の自分自身を見つめる勇気を持つことなのだ。決して惑わされたり、自分を誤らせたりしないこと、これが真面目な人間の日々の祈りでなければならないだろう[41]。

四、同化が普遍的な解決方法

上に示した三人の同化ユダヤ人のシオニズム批判は、もちろんその表現の仕方にさまざまな違いはあるが、彼らの主張に通底しているのは、同化の有効性を是認し、いやそれ以上に同化の推進が最善の反ユダヤ主義の解決策であると推奨していることだ。そしてこの認識はウィーンの同化ユダヤ人の最大公約数を成す意見であった。ウィーンの同化ユダヤ人を支配していたこの空気を、作家シュテファン・ツヴァイクは自伝『昨日の世界』で再現し、あわせてパレスチナへの帰還を主張するテオドール・ヘルツルに対する彼らの幻滅感を見事に伝えている。

鋼鉄製の弓の貫通力を持ったこの小冊子が出たとき、わたしはまだギムナジウムの生徒だった。でもウィーンのユダヤ人市民階級から呆然とした怒りの声が上がったのをまだ覚えている。彼らはつっけんどんにこう言った。いつもは大そう賢明で、機知に富み、教養ある作家にいったい何事が起こったのか。何という馬鹿げたことを書いて行動するのだ。どうしてわれわれはパレスチナに行かなければならないのだ。われわれの国語はドイツ語であって、ヘブライ語ではないし、われわれの故郷は美しいオーストリアだ。われわれは善意の皇帝フランツ・ヨーゼフの下で素晴らしく快適に暮らしているではないか。われわれは着実に成功を収めて安泰な地位を得ているし、平等の権利を与えられた国民で、この愛すべきウィーンに根を下ろした忠実な市民ではないか。そして今や、あらゆる宗派上の偏見が二、三〇年のうちに無くなるに違いない進歩した時代に生きている、そうではないのか。どうして、ユダヤ人として発言してわれわれに助力を惜しまなかった彼が、最悪の敵に言い分を与えてわれわれを隔離しようとするのか。だってわれわれは、日々ドイツ人の世界により密接かつ親密に結びついていっているのだから、と。またラビたちも説教台から躍起になって反対し、『新自由新聞』の主筆は、その〈進歩的〉な新聞でシオニズムという言葉を使うことさえ禁じた。（略）そしてテオドール・ヘルツルが劇場に姿を見せると、すべての客席から「陛下のお出ましだ」と冷やかす声が上がった。(42)

ツヴァイクは同化ユダヤ人一般の感情という体裁を取っているが、このシオニズム否定の言葉はもちろん彼自身の真情吐露であることは間違いない。しかし、ヘルツル個人に直接言及することなくシオニズム批判をすることは到底できない相談であるので、彼には自分の見解としてシオニズム批判に踏み切れない理由があった。というのは、『新自由新聞』文芸欄記者として作家志望の青年ツヴァイクに面接して、彼の投稿の採用を決定したのがヘルツルだったからだ。この一流新聞に彼の文章が掲載されたことによって、家の中での立場が劇的に変わり、加えて、将来に光が見えたときの喜びをツヴァイクは思い起こしてこう表現している。「わたしの文章が〈新自由新聞〉の文芸欄に華々しく採用されたことの本来の意味は、日常生活に重大な変化をもたらしたことだ。つまり、わたしは家で予想を上回る信頼を獲得したのだ。（略）家人にとっては、ウィーンのブルショアジー全体がそうであるように、〈新自由新聞〉で褒められていることが重要であった。（略）「文芸欄」に書かれてあることは、彼らにとっては、最高の権威によって保証されたものと思われたのである。（略）わたしはしばしば、それもほぼ定期的に文芸欄に発表するようになったので、ほどなく恐ろしいことに近隣で注目を浴びる存在になって

いた[43]」。

シオニズムという一点を除いて、尊敬し恩義もあるヘルツルを、ツヴァイクは面と向かって批判することがどうしてもできなかった。さりとて、シオニズムを肯定することはそれ以上に彼には許せないことだった。ツヴァイクはこの心の中の揺れをこう伝えている。「わたしは、広く世に知れた、それゆえに重い責任を負った部署で、決然とわたしを推薦してくれた最初の人が、テオドール・ヘルツルという卓越した人物であったことを常々特別な勲章のように感じてきた。したがって恩知らずに見えるかも知れないが、わたしが、おそらく彼の望んだようには、積極的に彼に連帯してシオニズム運動に参加できないと決心することは辛いことだった」と[44]。されど、ツヴァイクはヘルツルへとの個人的な関係に配慮しつつ、きわめて穏やかに、だが決然と、大変上手に当時の同化ユダヤ人のシオニズムに対する嫌悪感の再現に成功していると言える。

五、ラビたちの同化奨励

もちろん文脈は違うが、ユダヤ人に積極的に同化を奨励したラビたちがいた。なかでもウィーンの主席ラビ・モーリッツ・ギューデマンは、ヘルツルの『ユダヤ人国家』が出ると、翌年反論の書『民族主義のユダヤ人』を上梓してシオニズムを否定した。彼はユダヤ人の現状をこう総括する。ユダヤ人は、紀元七〇年の第二神殿の破壊以降独自の領土を持たず、ディアスポラの状況の中で生きてき、すでに民族としての形態を放棄して、彼らが移住したそれぞれの国で国籍を獲得した。こうした形態のもとで宗教を唯一の絆とする会衆としてのユダヤ人に「国籍意識を再覚醒させてユダヤ人国家の再建」に踏み出させたのが現下のシオニズム運動の実体である。しかしそれは、ユダヤ人の社会解放に誘発されて起こった反ユダヤ主義に対する反動として発生した現象にすぎない。したがって、反ユダヤ主義が顕在化していなかった三〇年前には、ユダヤ人をひとつの民族と宣伝し、主張する人は皆無だった。つまり、「ユダヤ人」という呼称は彼らの信教に由来するものであり、国籍を問われた場合、彼らはドイツ人やフランス人、イギリス人と名乗っただけで、民族主義者のユダヤ人など存在しなかったのである、と[45]。

本来シオニズムとは、ギューデマンによれば、バビロンの捕囚時代に聖地崇拝に基づいて発生したものであった。この聖地崇拝が、十九世紀のロシアで発生した度重なるポグロムに起因して、パレスチナへの入植移住を促進する運動に姿を変え、これが政治的シオニズ

ムと言われるものである。そこに西方ユダヤ人が主張するユダヤ民族主義が加わって、ユダヤ人としての民族意識が形成されていった。この二つが合体したものが、ヘルツルが展開しているシオニズムである、と彼はみなす。

ギューデマンは近代的な概念としてのユダヤ人の民族的な存在を否定するが、もちろんユダヤ人がまだイスラエル人と呼ばれた遠い昔、祖国を持ち、言語、宗教、司法、風習に統一性を保持した民族であったことは歴史的事実として承認する。しかし、この民族は神によって作られて、はじめてひとつの統一体として形を取って現れた、と彼は『申明記』第二章第九節を引いて力説する。「イスラエルよ、静かに聞きなさい。あなたは、今日あなたの神、主の民とされた」。ゆえに、ユダヤ人は神がいなければ、民族として自らを自覚することはなかった。ユダヤ人の民族意識は、したがって神の概念と密接に結びついて発展したので、宗教的なことすべてを排除し、ユダヤ人に近代的な民族概念を応用して、民族の自覚や感情を呼び起こすことは不可能であり、誤りである、とギューデマンは断定する。かりに、すべてのユダヤ教徒に再びひとつの民族になるという努力を目覚めさせて国家再興に取りかかり、それが成功したならば、それはユダヤ人の歴史の連続性が途絶えたことを意味する。ギューデマンはそれを、ディアスポラが「神の賢いプラン」に基づくものと捉えて、こう説明する。ディアスポラは、第二神殿の破壊以降言語や風習をまったく異にして生活してきたにもかかわらず、「ユダヤ民族」が統一的な信仰によって共同体として存在し続けて、時間や場所に拘束されずに自らの不滅生を明示した、すなわち「ユダヤ民族」が国家形態以上のものであることを世界に向けて示すことを可能にした例証である、と。[46] しかもギューデマンは、ディアスポラをユダヤ人の歴史の中で最も栄誉ある時期のひとつとまで位置づけて、[47] ユダヤ人は決して「ひとつの民族」になろうとしてはいけないし、国家建設という偽りの約束に惑わされてはいけないとシオニズムを否定し、かつヘルツルを扇動家と規定する。

ギューデマンのシオニズム否定は、もちろんユダヤ教に依拠していることは自明であるが、その否定が同時に同化ユダヤ人としての意識にも基づいていたことは、この反論文書の冒頭部分で示されるシオニズム否定の論拠から明らかである。「（シオニズムの出現によって）彼らが何百年もかけて手に入れ、祖国愛や愛国的な行動によって勝ち取った、そして今や憲法によって保障された市民権や公民権が突如また疑問視されたことに、ユダヤ人は憤慨した」。[48] 彼が有効として提示した反ユダヤ主義の解決策は、結局同化の推進であった。そして、ディアスポラを生き抜いたユダヤ人は、自らに同化能力が備わっていることを証明したとして、彼は『コリント人への手紙第一』第九章にある「わたしはあらゆる種類のどのような人間にもなった」を引いてきて、このキリスト教の使徒パウロの言葉が、まさしくユダヤ人

の根本特性である同化能力を言い当てていると指摘する。ギューデマンは文字通りクラウスの主張と同じに、ユダヤ教を「同化の宗教」と位置づける。じっさい一八七〇年代以降、都市のユダヤ教会衆区では同化主義が主流を成していた。

これとまったく同じ主旨で、ドイツのラビ協議会の理事が五人、一八九七年第一回シオニスト国際大会開催の直前に、ベルリンの有力紙に大会への不参加を呼びかける声明文を公開し、国家建設が教義違反であると指摘したのはもちろんであるが、同化もユダヤ教の教えのひとつであるとして同化努力を訴えた。「ユダヤ教は、各自が属している祖国に献身的に仕え、全身全霊をもってその祖国の利益のために寄与することを、ユダヤ教徒の義務とする」[49]と。つまり彼らは、シオニズムがユダヤ教の教義と祖国愛の双方に違反しているとして、シオニスト大会への出席を止めるようマスメディアを通じてアピールを発した。

Ⅲ

バルフォア宣言とその後

一九一七年、外相アーサー・バルフォアがロスチャイルドに宛てた書簡――「バルフォア宣言」――という形で、パレスチナにユダヤ人のためのナショナルホーム建設に対するイギリス政府の支持を公にしたとき、東方ユダヤ人たちはシオニズムが目標達成に大きく前進すると期待を寄せた。その時でも、同化ユダヤ人たちのシオニズム対する態度に大きな変化は起こらなかった。たとえば、ウィーンのユダヤ人社会の長老でウィーン市議会議員も務めたジークムント・マイヤーは、シオニズムの行方を非常に冷笑的にこう展望する。「ユダヤ人国家には二つのことが欠落している。ひとつは、必要とする土地を提供してくれる国である。もうひとつは、有用なユダヤ人がそこへ移住しようとするかどうかだ」[50]と。反ユダヤ主義にまったく無頓着なマイヤーの発言とは裏腹に、ウィーンのユダヤ人の状況は悪化の一途を辿っていた。じっさいに、一九一八年にキリスト教社会党は、同化の阻止を党の機関決定として謳った。この時代状況にもかかわらず「有用なユダヤ人」、つまり同化ユダヤ人の反シオニズム意識と、その背景にある反東方ユダヤ人感情には変化が認められなかった。そうした東方ユダヤ人に対する同化ユダヤ人の感情をきわめて露骨に描出した小説が出た。ユダヤ人の台頭によってあらゆる領域でユダヤ人との競争に負けた、数の上では圧倒的に多数派を構成するキリスト教徒は、国会でユダヤ人のオーストリアからの追放を決議する。

しかしユダヤ人がいなくなると、オーストリア経済は破綻の危機に瀕し、世界都市ウィーンは田舎都市に下落してしまい、ユダヤ人の帰還を再決議しなければならなくなる顛末を内容とした、キリスト教徒の無能さをきわめて挑発的に描いた、フーゴー・ベッタウアーの小説『ユダヤ人のいない町』（一九二四）がそれである。この小説では、反ユダヤ主義が経済的理由から人種的なそれへと主張が変化し、過激さを増した時代に入っていたにもかかわらず、同化ユダヤ人の未同化のユダヤ人に対する嫌悪は依然として一般的な感情として示される。たとえば、追放前夜、ロンドンへ移住することを決めた銀行家が、同行を許した甥の医学生とカフェの一角で声を潜めて語り合う内容に、同化ユダヤ人のシオニズムに対する反感と、それを増幅させている未同化ユダヤ人への嫌悪や差別、敵意が露骨に表出されている。同時に変わらず経済支配を続ける同化ユダヤ人の圧倒的な財力もその内容から見て取れる。二人の会話はこう続く。「おじさん、ロンドンへ連れていってもらえることに感謝します。すごく嬉しく思います。だって、ここだけの話ですが、エルサレムなんて真っ平です！ユダヤ人だけだなんて、考えられないことです！」。伯父はおおように微笑んで「エルサレムなんて糞食らえさ」。・・・「ところでおじさん、税務署には財産や収入の本当の額を申告していないでしょう。一体どうやって、おじさんのお金を向こうで受け取れるのですか」。「何のためにキリスト教徒の友人がいると思う。今日わたしは、ここだけの話だが、製造業をやっているシュスターのところへ一〇億クローネ分の株券と現金をもって行き、それに見合った額のロンドン銀行宛ての送金証書を受け取った。もちろん、あの悪党がただするわけはなく、しっかり取り分は稼ぐ[51]」。同じような会話はこのカフェの三〇あまりのテーブルでも交わされていて、どこでも満足のうなずきをもって終わった。

すでに一八八三年に人種的反ユダヤ主義者は、それが当時の反ユダヤ主義の行動規範とはなるに至らなかったが、同化の否定を声高に主張していた。ドイツ民族派のリーダー、ゲオルク・シェーネラーは、この年に創刊した彼の政治会派機関誌『偽りのないドイツ人の言葉』の中でこう言って明確に同化を否定した。「わたしの支持者は、ユダヤ人がドイツ語を話し、ドイツ人のように振る舞っているからという理由で、彼らをドイツ人と認めてはいけない。スラヴ人やロマンス人はアーリア人であり、われわれと起源が同系である。しかし、ユダヤ人の起源は、われわれとまったくかけ離れている[52]」と。そしてついに一八八五年、彼の会派の「リンツ綱領」に「目標とする改革を実現するためには、公的な生活のすべての領域からユダヤ人の影響力の一掃が不可欠である」と反ユダヤ人条項が追加されて、人種的な反ユダヤ主義が「ドイツ人連盟」の政治目標として明文化された。

そして一九一八年、カール・ルエーガーによってオーストリアの最大政党に成長していたキリスト教社会党の機関紙『ライヒスポスト』は、現代の反ユダヤ主義は同化の動きを阻止することであると宣伝し、いよいよ人種主義を前面に押し出した運動が加速度的に拡大していく時代に突入する。ヘルツルが同化の無効性を予見した判断は、その後のある時代の展開に限れば、確かに時代を先取りしていたと評価できるだろう。

注

(1) Peter G.J. Pulzer, Die Entstehung des politischen Antisemitismus in Deutschland und Österreich 1867 bis 1914, Gütersloh 1966, S.7

(2) Joseph Rot, Die Juden in Wanderschaft, in: Joseph Rot Werke, Bd.3, hrsg. v. Hermann Kesten, Kiepenheuer &Witsch, S.324 u. 331

(3) Vgl. Alex Bein, Die Judenfrage, 2.Bd., Stuttgart 1980, S.268

(4) Theodor Herzl. Briefe und Tagebücher, 2.Bd., hrsg. v. Alex Bein, Hermann Greive, Mosche Schaerf, Julius H. Schoeps, Berlin, Frankfurt/M, Wien 1983, S.538f

(5) Steven Beller, Herzl, Wien 1991, S.50

(6) Manfred Dickel, Felix Salten als zionistischer Schriftsteller. In: Felix Salten. Schrifsteller-Journalist-Exilant, hrsg. v. Siegfried Mattl, Werner Michael Schwarz, Wien 2006, Sl72

(7) Felix Salten, Neue Menschen auf alter Erde. Eine Palästinafahrt, Berlin-Wien-Leiptig 1925, S.103

(8) Vgl. Manfred Dickel, Felix Salten als zionistischer Schriftsteller, a.a.O., S.169

(9) Vgl. Dr. Ludwig Ernst, Kein Judenstaat sondern Gewissensfreiheit, Leipzig und Wien 1896, S.7

(10) Vgl. ebda., S.8

(11) Ebda., S.12

(12) Ebda., S.12

(13) Ebda., S.23

（14）Ebda., S.20

（15）Vgl. Karl Kraus, Wiener Chronik, in: Karl Kraus. Frühe Schriften, 2.Bd. 1897-1900, hrsg. v. Joh. Braakenburg, München 1979, S.151f.

（16）Vgl. Karl Kraus, Eine Krone für Zion, in: Karl Kraus. Frühe Schriften, 2.Bd., a.a.O., S.298

（17）Vgl. Harry Zohn, Karl Kraus, Frankfurt/M 1990, S.35f.

（18）Vgl. ebda., S.44

（19）Karl Kraus, Eine Krone für Zion, a.a.O., S.314

（20）Karl Kraus, Die Fackel Nr.657-667, August 1924, S.166f.

（21）Karl Kraus, Die Fackel Nr.649-656, Anfang Juni 1924, S.138

（22）Karl Kraus, Eine Krone für Zion, a.a.O., S.313

（23）Vgl. Hans-Ulrich Lindken, Arthur Schnitzler. Aspekte und Akzente, Frankfurt/M-Bern-New York- Paris 1987, S.86

（24）Vgl. Dr.M. Güdemann, Nationaljudentum, Leipzig- Wien 1897, S.3f.

（25）Zitiert nach Alex Bein, Theodor Herzl. Biographie, Wien 1934, S.173

（26）Theodor Herzl, Briefe und Tagebücher, 2.Bd., a.a.O., S.190

（27）Karl Kraus, Eine Krone für Zion, a.a.O., S.331

（28）Ebda., S.310

（29）Ebda., S.30

（30）Ebda.

（31）Vgl. Hans-Ulrich Lindken, a.a.O., S.79

（32）Vgl. ebda., S.84

（33）Ebda.

（34）Vgl. ebda.

（35）Arthur Schnitzler, Der Weg ins Freie, in: Die Erzählenden Schriften 1.Bd., Frankfurt/M 1881, S.696f.

（36）Ebda., S.831

（37）Ebda., S.756

（38）Ebda., S.721ff.

（39）Ebda., S.833

（40）Arthur Schnitzler (1862-1931), Materialien zur Ausstellung der Wiener Festwochen 1981, S.20

（41）Arthur Schnitzler, Der Weg ins Freie, a.a.O., S.833

（42）Stefan Zweig, Die Welt von Gestern. Erinnerungen eines Europäers, Fischer Verlag 1982, S.126

（43）Ebda., S.133f.

（44）Ebda., S.130

（45）Vgl. Dr.M. Güdemann, Nationaljudentum, a.a.O., S.3

（46）Vgl. ebda., S.41,27

（47）Vgl. ebda., S.39

（48）Ebda., S.4

（49）Theodor Herzl, Protestrabbiner, in: Zionistische Schriften, hrsg. v. Prof. Dr. Leon Kellner, Berlin 1920, S.135

（50）Zitiert nach Hellmut Andics, Die Juden in Wien, Wien 1989, S.393

（51）Hugo Bettauer, Die Stadt ohne Juden, 1924 Wien, S.23f.

（52）L.L.Carsten, Faschismus in Österreich, München 1978, S.15